
新撰な彼ら

shiraha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新撰な彼ら

【著者名】

NZマーク

N3524X

【作者名】

shiraha

【あらすじ】

銀魂のトシと総悟が監禁された話の中にオリジナルヒロインの佳奈ちゃんを組み合わせてみました。

その他もうもの話連載中。

鍵取りゲーム

ガタン

田を覚ますと真っ暗なロッカーの中に私はいた。

ガチャ…

「やつとお田覚めですかイ？」

「呑気でぬきなんだよ。」

「総悟にトシ。あー、また総悟の仕業ね？」

右隣のロッカーにはトシ。正面の棺桶っぽく横たわるロッカーに総悟がいた。

「違いますぜ？首元の口元気にならないんでさあ？」

「首？」

私は首を触った。ジャラッと首輪で繋がられている。

「つたぐ。とりあえず出よ!」

「ん。」

それぞれロッカーから出ると仮面をした男がモニターに映っていた。

『いいか諸君。君たちの首輪は繋がられている。奥の部屋に首輪の鍵がある。それを取れば…』

総悟が全力で走った。

ズルズルズルズル

メリッ

トシが引っ張られ、壁にめり込む。

「手が届かねえ。」

「あれ？私は一人と繋がつてない。」

『君は一応華的な存在だ。君専用のトイレもある。』

トシと総悟が引つ張り合つてゐる。

「私トイレ。」

「いいんですかイ？盗撮してるとかもしかねえぜ。」

「うそー！じゃあトシが壁になつて。」

「ふはっ！バカかてめえ！」

総悟がニヤリと笑つた。

「じゃあ壁を向いて三人でシたらどうですかイ？」

「それはそうだな。」

「私女だからー。」

総悟は壁に近づいていた。トシも反対側の壁に向かつ。

「やつぱ無理ー！」

バタン

私はトイレに入った。盗撮はなさそうだった。

トイレから出るとトシがおかしい気がした。

「トシ?」

「…。」

「とりあえずこのコンクリートの欠片でパイプを叩いたらどうですかイ?」

総悟が真面目に言った。

「ああ… そうだな。」

ガンツ ガンツ ガンツ

総悟は一人でパイプを叩いた。

トシはそれを見て何か考えている。

「ねえ。総悟らしくないよね。いつもならトシを殺す勢いで石を投げてるのに。」

ガンツ ガンツ ガンツ

「何を言つてるんですかイ？今は犯人にはとらわれないことが先決に決まつてるだろイ。なあ、土方サン。」

「…あ、ああ。佳奈も手伝え。」

「ん。私は私のをほどかないとね。」

トイレのドアノブに巻き付けてある鎖。私はあの鍵まで届かない。犯人によると鍵を一人が使つたら他の一人の首輪が爆発するらしい。

「私のはすぐ取れそ。」

「はあ。佳奈が自由になつても意味ないですか。」

「総悟の言ひ通りだな。」

「ちよつとひどくない？もとはといえば一人がドライブに連れて行くとか言つて私を拉致つたんぢやない！」

「パトカーに乗つたの初めてつて騒いでたじやねえか。」

「こりこり奴らでしたね。」

「私は先に脱出して近藤さん呼ぶからね。」

「へいへい。」

すると、トシが総悟を睨んだ。

「総悟疲れたんじゃねえか？先に休めよ。」

「いえ、土方サンこそあの鍵の前で休めばいいであります。」

「総悟は鍵の横がいいだろ？」

なんだこの二人。

「私は先に寝るね。」

「俺も寝る。」

「俺が寝るであります。」

「うさ。寝よ。」

「パン！
バタン。」

総吾はドア無し。

なにこれ。首が凝るんだけど。最初は総悟の悪戯だと思つたけど、あんなに起きあがめできむわけないよな。

あと3日もあるじゃ。

グルルルル：

お腹すいちゃってなかなか寝れない。

20分後

私は爆睡した。

そして10時間後。

ガチャ

「ふわあー！寝た寝た！」

「俺も爆睡だつたぜ。」

「最高の寝心地だつたでさあ。」

この二人絶対眠れてないね。モニターにまた仮面野郎が映った。

『鍵はまだ取つてないよつだな。今から俺の相棒をそっちによこす。』
『たけしー！』『飯よー』母ちゃん！勝手に入んな…ブチツ』

「おい。今母ちゃんて言つてたよな？」

「あのパークからすると浪速ね。」

「そんな事より見てくだせえ。あの影は……」

大きな影が鍵に近づいて来た。

それは大型犬だった！

『ちなみにその犬は光り物が大好きでね。いつも散歩の時に俺のところまで持つてくるんだ』「たけしー！開けなさい！…お父さんが話しがあるって！」「たけし。来なさい。」…なんで父ちゃんに言ってんだよーー！ガタン』

「ねえ。今お父さん出て来たんだけど。どういと？」

「そんなことより。佳奈。この状況で爆笑とはビリコの神経である。

「

私は爆笑していた。

「だつておかしいでしょ。あのシリアスな雰囲気から犬て…あはは
！」

その時トシが変な声で叫んだ。

「あの犬…鍵を食いやがった！」

「これでいいんでさあ。俺たちは協力して脱出するから鍵はいらね
え。」

「総悟…あんたほんとに総悟なの？」

が、犬が鍵に んこしようとしている。

「うあああああ！！」

トシが全力で走った。総悟は壁にめり込む。佳奈の笑いが止まる。

「ちょ…。総悟大丈夫？」

「どうどう本性を現しやがつたな。」

トシは犬を片手に鍵を窓の外に捨てた。

「これで邪魔な鍵はなくなつたぜ！パイプを壊すぞ。」

するとまたモニターから声がした。

『お前らに脱出するヒントをあたえる。左右の奥のロッカーにアイテムが入ってるから使え。』

ガタツ

「総悟ー！」

「とりあえず見てみるしかないでさア。」

開けたらチューチューアイスが一本入っていた。

「俺はそつちがいいでさア。」

「あ？ これは一本で食つもんだろ。」

「これだから一人っ子は。」

「私にもわけてよ！」

「佳奈は俺のをチューちゅーしどけばいいんぢゃないですかイ？」

総悟が黒く笑つた。

「総悟よりトシが大きそだからトシがいいかな。」

「おまえら何の話してやがんだバカ！」

突然総悟が倒れた。

「俺はもういいでさあ。一人でチューちゅーしてください。」

「総悟！」

「うむ。[冗談でしょ?]

「あつちのロッカーにコレが入ってあつたでセア。俺がコレで…」

「ショウ…

総悟は糸のこぎついで首を切つた。

薄暗い部屋に散らばる血…。

「う…や。」

「佳奈掴まれ!」

トシに手を伸ばすと恋人繫ぎをされた。

「どうしたの?」

「う、おおおおおおーー。」

トシが総悟を肩に乗せ、私と手を繫ぎ踏ん張りだした。

バキッ

バキバキ…

『まさかあの地道な作業が意味のある事だったのか…』

ぶちぶち…

バキン！

なんとトシは鎖をドアノブとパイプから解放したのだ。

「トシちーこー！」

「行くぞー！」

私たちは走った。が、トシは足場の悪いコンクリートによって落ちてしまつた。

「トシ！今助けるからね！」

「へへへ……」

総悟がムクリと立ち上がった。自分の首輪を簡単に取り外し、私も取り外してくれた。

「へ？」

「楽しかつたでさア。土方……バイバイ。」

ヒュー……

「ふざけんなコノヤローーー！」

「ア」「シ

「やっぱ総悟の悪戯だつたんだね。」

『いやあー・楽しかつたですねー・またお願ひしますー。』

「今度は銀パツパー・マ野郎こしますぜ。さうと面白れモソが見れるでセア。」

鬼だ。可愛い顔してやつぱは総悟は鬼だ。

「ち、佳奈とドライバの続きでもしまじょつかねイ?」

「え。トシは?」

「土方の野郎はもうよじ登つて来てますア。」

下を見るとトシが鉄骨を自力で登つている。

「総悟おおおおおーー首洗つて待つてろーー。」

「知るか。佳奈は俺のモンだセア。」

「最後だけヒロイン落ち?/?」

「うつて総悟のドッキリは幕を閉じた。」

鍵取りゲーム（後書き）

中途半端な話から始まってしまいすいません。徐々に銀魂を勉強していきます。

マヨから始まる不思議な出会い

これはオリキヤラと真選組一人の出会いの話である。

沖田総悟は土方十四郎と町の巡回をしていった。

「げ。マヨが切れた。総悟置つて来い。」

「俺ア忙しいんでね。」

「つひー！何アイマスク取り出しだすか寝よう的な顔してんだよー。」

「マヨ臭いんでこれ以上近づかねえでくだせよ。」

そんなわけで土方十四郎は近くのスーパーに入つてった。

「げ。マヨが品切れじゃねえか。」

レジに並ぶ女がカートにぱぱぱぱマヨを入れていた。

「おー。10個譲れ。」

「へ？ああ、マヨななりキロ先のスーパーにありましたよ。」

それが佳奈との出会いだった。

「頼む！一個でいいから！」

「真選組が土下座していいんですか？」

「マヨの為ならじゅうがねえ！』

「何がじゅうがねえんださ。マヨへりい取りあづりい。…。ちりい。」

沖田総司は固まつた。マヨを持つ女に見覚えがあつたからだ。

「おめーは姉貴の知り合い。」

「總悟じゅごー。」

そしてマヨを半分貰つた土方。

「自分のスーパーがマヨ切れ?」

「えいえい。ウチの店やたらとマヨの売れ行きが良くてね。」

「おめーのおやじさんの店なんじゅねえかい。あの屯所の前の店。」

土方はタバコの火を付けた。

「つたぐ。誰だそんな重度のマヨラーは?
「コイツである。一度と店に出入り禁止にしねえとまたマヨ切れしませ?」

いつして彼らは出合つた。

「おい。スーパーの娘。」

「土方サンですよね。私は佳奈です。」

「これからキープたのんだ。」

「土方の野郎のおかげで毎間の時間がなくなつたでさあ。」

…

…

「無茶との出合ってヒロイックのおかげだったな。」

「…………」

「俺ア遠ご両から出合つてたでせア。」

「ちうちうマジナハソーハなかつたわけ……。」

「私たの出合はマジから始まつた。

最近山崎がソワソワしてやがる。俺は仕方なく後をつけた。

ドカン！

あと半歩遅かつたら並たつてた。

「向サボりうとじしてゐんやでわア。」

「総悟。まだ時間あるだろーが。」

田常茶飯事の事だから驚きもしねえ。

「俺ア一眠りやす。」

チツ。総悟のせいいで山崎を見失つちまつた。

適当に廊下を歩いていると、塀を越える間にまで跳ねる//ハトンの羽を見つけた。向こうで誰かがミントンやってやがんのか。

俺は直感的に正門を出た。

「山崎と佳奈ー。」

二人は楽しそうにミントンをしていた。

「こやあ。田元上達してますねー。」

「山崎さんが教えるのが上手いんですよ。」

ぽーん

ぽーん

「山崎の野郎俺の佳奈に手口出すなんざこ一度胸でさア。」

「び…くつした。お前寝るんじゃなかつたのかよ。」

「もうもうオシオキの時間ですか。」

総悟が一ヤリと笑った。

「うわあー沖田隊長ー！」

「慌ててゐる所の事じやねーか。」

総悟は鞄を…。

「あれ?・ンタリケット?..」

「佳奈をかけて勝負だ。ミントンキャラは俺が奪つてみせのせー。」

「やめひ総悟。時間だ。」

俺はいつタイミングでコート中にに入った。

ズビシイ！

あれ?今頭に何か当たった気がするんだケド。

「部外者はすつことである。」

「へ？ 山崎？」

「土方サン。男の勝負に口を挟むモンジやアねエゼッ！」

「邪魔？ ねえ。俺邪魔者？」

「トジ。マヨあがるからおいで。」

「俺はモノで釣られる……。」

そして佳奈の隣でマヨをすすりながら一人の試合を見た。

「沖田隊長やりますねー。」

「俺よつ早く彼女作つてんじやねエよ。」

「あやかそんなプライドの為こそっ。」

だんだん飽きて来たのか欠伸をし出した佳奈。

「トシ。 私帰るね。」

「 」のマコ貰つていいんですかーー?」

「なぜに敬語。 トシに持つて來たからあげる。 てか、口つけてるから使えないし。」

「こつでも遊びに来い!」

マコがタダで貰えるなら何でもいいんだよ。

「 」的なモンですか。」

総悟は山崎に勝つた。

「 沖田隊長ーーミントンキャラはどうか取り上げないで下をこーー!」

「 土方の野郎抹殺計画に協力するなら仕方ねエ。」

「 おこー聞けてるだぞー。」

「はい！協力します！」

そしてまた総悟がニヤリと笑つた。

購買部的な役割

真選組の屯所の前の小さめのスーパーの娘で手伝いをしている私、佳奈。

元々は総悟の家の近くだったんだけどつい1年ほど前に越して來た。真選組の人たちが訪れる事が多い…わけじゃない。たまに近藤さんが来てくれる程度かな。

「あー…、暇。」

適当に店の窓の掃除をしながら呟いた。

ガー…

自動ドアが開く音がしたから大きな声でお出迎えした。

「いらっしゃいませ!」

「最近見ねエと思つたら真面目に働いてたのかイ?」

「ヤリと総悟が笑った。

「ひょっとして近藤さんのおつかい？」

「バナナ食いてエッて不機嫌そうに咳いて胸を叩いて暴れてたぜ。」

「エコカラと間違つてない？」

総悟は真選組ソーセージの前で止まつた。

「今なら一本増量だよ。」

「領収証くだせや。」

バナナ一房と真選組ソーセージを買つてつた総悟。経費で落とすあたり彼らしい。

また暇になつた。

ガー：

「こりひしゃこませ。なんだ。トシか。」

「最近近藤さんが元気ねえんだよ。フルーツ盛りあるか?」

「せつしき総悟がバナナ買ってつたよ。」

「へえ? やつぱ俺はフルーツ盛りを買わねえとな。あと、タバコ。」

レジに走る私。

「親父さんはいねえのか?」

「ん。お父さんもお母さんも営業に行つてゐるよ。」

「ひなんちうせえスーパーが営業に行くのかよー。」

「半分サボりだと思つたさ。」

トシは経費で落とせないから。

「またドライブ行こつぜ。今度は一人きりがいいな。」

「パトカーならやだよ。」

トシはタバコに火をつけて店を出た。

近藤さん大丈夫かな。

ガー…

「佳奈ちゃん！元気？」

近藤さんはめっちゃ笑顔で店に入つて來た。

「あれ？近藤さん元気ないんじゃ…。」

「俺はずっと元気ピンポンだ！」

総悟もトシも理由をつけてここに來てくれたのだろうか？

「バナナ安いな。」

暇があるからバナナを買つてもうひつ事にした。

ハピバ天パくん

「お。喧嘩か？久しぶりにやるか。」

土方の野郎がパトカーから下りた。しゃあねエから俺も遅れて下りやした。

パチンコ屋の前で野次馬が集まっている。

「あれ？多串くんじゃねえの。」

天パでやる気のなさそうな男が近づいて来た。

「あんけやん。話ついてないぜー！」

「へ？だから、俺はパチンコの玉くすねたりしねえってば。」

「うそ！けー俺の一箱丸」と持つてつたじやねえかー！」

くだらねえ掴み合いしてやがる。土方サンもあきれて…。あれ?何かこの人汗すげえでさあ。

「總悟。俺アパチンコの玉なんかくすねたことねえからな。若氣の至りとかじや全然そんなん…バカだろアイツバカ!」

「カミングアウトしてどうするんですかい?」

「よし。行くぞ。」

それについて、銀髪天パの男どつかで見たことがあるような。

「おい。何してんだ?」

「やつぱり大串くん。このオッサンが因縁つけてくんの。俺今日誕生パーティーだから忙しいんだけど。」

「分かった。一箱分払え。」

「マジで俺を疑うわけ?」の純粋な眼差しが見えないの?」

「ただのオッサンの喧嘩でさア。散つた散つたア。」

野次馬を解散させて一人を見た。

「俺、ジャンプ代しか手持ちないんだよね。」

土方サンは銀パツ天パ野郎の財布を奪つた。

「」いや、ジャンプ代もねえな。」

「え。あのオッサン俺の財布からお金までとったの? 一箱分払えよ。」

「

「いや、話をやや」しつしても無理だから。」

店の人が出で來た。

「あの…。サングラスの親父が一箱奪つて見ました。」

「ほひ、俺じやねえだろ。あーあ。パーティに遅刻しちゃう。そー

だ。あのパトカーなら聞こむつかも。

「テメー……斬るー。」

俺は山崎に車を出すよ!って言った。

「ハピバでもあ。」

10月10日は銀ちゃんの誕生日。

おめでとうー・銀ちゃん!-

…ペー

「はい。ちゅーちゃん付けないとダメだよ。」

総悟はチャリの鼠取りをしていた。が、注意したチャリは慌てて逃げてった。

「今のがキはしつけがなつてねエでさア。」

「テメーもガキだろ。」

「土方サン。何しに来たんですかイイ?」

「息抜きにタバコ買いに来たんだよ。」

結局この日は真選組の屯所に帰ることになつた。

「ガキといやあ、佳奈つて何歳だ?」

「ありやあ童顔だから、俺よりガキでさあ。」

「佳奈さんは22歳ですよ。」

運転手Aが話しだした。

「なんで知つてんだよ。」

「山崎から聞きました。」

しーん
パトカーの車内は静かになつた。

「腹ペコでやあ。」

「マヨならあるば。やらねハけどな。」

「真選組ソーセージ食いてエ。」

ふと外を見ると佳奈が男と歩いていた。

「俺ア 健康の為にジヨギングで帰りました。あ。

「…。車停めろってよ。」

「はは。」

総悟は腹ペコなのも忘れて走りだした。

「総悟ーー！」

「酔…。叫びながらマコを取り出してください。」

「佳奈ア。見損なつたぜイ。」

「ちよつと良かつたあー今道聞いてたの。この方がめつちも親切で

ね。」

「じゃ、これで。」

道案内人はすたこらさつと逃げてった。

「俺と言つ男がありながら浮氣するたア。そんなに俺を好きなんですかイ？」

「何度も言つけどね。総悟の彼女じゃないから。」

佳奈の綺麗な黒髪が風に揺れた。

「ギャグに決まつてらア。」

「まあ、可愛い。」

なんなんだ。コイツら。と一人を見ながらトシは後ろから歩いていた。

「佳奈つて方向音痴だったのかイ？」

「ちつ…違つから…たまたまなの！」

「真つ昼間から下ネタとはいだけねエなア。」

「どうにかトシが入った。

「土方さんはパトカーで帰つてくだせえ。佳奈は俺が送りやす。」

「総悟テメー！そこまでして抜け駆けしてえのか？もうパトカーは帰つたよ。」

「二人とも私は一人で大丈夫だから。てか、トシはマヨに恋してるだけでしょ？」

トシはたまにマヨを差し入れするから好きなのか。

「俺は親父さんにバズーカを改造してもらつんでさア。邪魔しねエでくだせエー！」

「お前も親父が付録だから好きなんだろーが！」

と言つぱりしいです。

「どうせ。私には魅力ないですよ。」

先を歩く佳奈でした。

改造王の父を持つ子供の苦闷

私のお父さんはツルツとハゲている。

「佳奈ー。ペンチ持つて来い。」

「自分で取つてよ!」

と言いながらもペンチを渡す私。

「お前の彼氏割り引きだから手伝つてもいいだろ。」

「総悟は彼氏じゃないってば。」

こんなに武器を改造したら、真選組に捕まつてもおかしくないのにいいのかな。

「でけた!バズーカ花火にバズーカクラッカー。」

「良かつたあ。それなら安全だね。」

裏口から総悟が入つて來た。

「お父さん。パーティに盛り上がるバズーカ出来やしたかイ？」

「まだお父さんになつてないよ？コレがバズーカ花火だ。でこっちがバズーカクラッカー。」

「面白そうでさア。むちやく」うちのクラッカーを土方の野郎に試してみるでイ。」

やつぱは畠の座をもらひ鳩に作りせたんだ。

「ときに総悟くん。」

「なんですか。」

「ちやんとお金くれるんだひつね？」

「…ケチくせハゲだゼイ。領収証を真選組當てでおねげしやす。」

「

「はい。まいどあり。」

けど、本物のバズーカより危険じゃないはずだからトシにひとつでは良かつたのかも。

その日の晩。
真選組屯所。

「はあ…。スッキリした。最近便秘気味でよオ。」

「副長。俺なんか下痢つスよ。」

トシと山崎がトイレから出て來た。

ズガン！

バズーカクラッカーが華麗に飛び出した。

「…。」

「わあ。綺麗ですね！」

「チツ。腰抜かせたりしねエのかイ。」

トシの瞳孔が開いた。

「おこ總悟。片付ける。」

「生憎俺ア片付けはしねH主義でわア。山崎りなじめどぞア。」

「こや、俺には関係…」

「//ヘンカラケット折つてここのかイ?」

総悟の手に山崎愛用のハンタントラウトが一

「…靈體。」

「近藤さん呼ばれてんだ。次通つた時に床が汚れてつと斬るが?」

「山崎。」

「ええー!汚したの俺になつてますよねー!ちよつと隠さーひへ

んですか！」

「次は花火だぜイ。」

次の日の朝、トシの部屋で花火が上garるとは誰も予想していなかつただろう。

「総悟オオオオオー！テメー斬る！今度こそぜつてH斬る！」

「受けてたちますぜイ！」

こうしてまた総悟は佳奈のパパに頼むのだった。

「あんれえー？最近領収証無駄に多くね？」

近藤さんは頭を抱えていたとか。

知ったカブリの恐怖

たまーに変なプライドが顔を出したりするじゃない?知らないのに
知ってるに決まってんじやん!って言つてしまつヤツ。

アレ、一番タチ悪いよね。

「まさか佳奈も万事屋の旦那なんて知りません。なんかみんな知つて

すいません。万事屋の旦那なんて知りません。なんかみんな知つて
る雰囲気だから知らないとは言えなかつただけなんです。

「最近歳なのが物忘れするらしいよね。」

「あー、精神年齢は爺さんかもな。」

トシが頷いた。

精神年齢年寄りつてことは若いの?山崎ヘルプ!

「「」ないだチャイナさんに入れられたボディーブローがまだ響いてるんですけど。」

チャイナさん？

まさか中国人の美女をはぐらせてる人？

「あのメガネの存在感は山崎に比例するでせア。」

メガネ？

メガネかけた旦那？

「多串くんじやない。久しぶり。」

「今テメーの噂してたんだよ。」

銀髪天パの人気が近づいて来た。どうしよう。知らないってバレる。

私は目をつぶった。

「改造ハゲの娘さんだよね。似なくて良かつたな。うん。似てたら声かけなかつたわ。」

奇跡がおきたあ！

「てか、万事屋の前にいて俺に会わないのはおかしいって。」

「で、旦那と佳奈の関係は何なんですか。」

「んー。従姉妹の親父の友達の娘？」

「そりゃ…そりなのよー。」

「撤収すつぞ。」

トシの言葉通り私たちは家路を歩いた。

⋮

「銀ちゃんにきなりビーフしたアル。」

「空氣吸いにいったの。」

「銀さん！仕事の依頼来ました！」

「また迷い猫だろ？」

彼らと絡むのはまた後のお話。

「一緒にいると自然にマヨ中にならねえよー。」

「佳奈。そんなにマヨネーズかけたら太るわよー。」

「あやーーなんどー」飯にまでマヨネーズかけたの私ー。」

家族で夜ご飯を食べてる時、お母さんに注意された。

「最近トシとよく食事してたからその時自然とマヨネーズかけてたかも。」

「土方くんはそんなにバランスの悪い食事なのか?」

お父さんの皿が光る。

「私が気をつければいいだけだからこの話はおしまい。」

そして次の日。

田玉焼きにマヨをかける私がいた。

「あれ。なにこの自然な動き。」

今日はお店が休みだからゆっくり起きたら、両親は出かけていた。

ガチャ…

裏口が開いた。

「ハゲはいねエのかイ。」

「総悟。ノックぐらいしてよね。」

「女捨てるヤツに言われたくなエ。なんでイその寝癖は。」

「これはいま流行りのファッショニヨー。」

総悟が食卓に近づいて来た。

「…。マリナーは土方の野郎で十分だろイ。」

「私このままじゃ本物のマリナーになつちや。じつじゆう総悟。」

一タリと総悟は笑った。

「そんなの簡単だぜ！」

総悟は丼にご飯を入れ、その上にソースをぐるぐるとかけた。

「コレを完食すればマジ嫌いになるぜ。」

「『飯にマジネーズ？』

「ここから食いなせ。」

女としてわざがコレは食べられないよなあ。

ガチャ…

「総悟。やつぱりコレか。近藤さんが…おー皿どうなメシじやねえ
か！ いただきます！」

ガツガツヒマ丼丼を食べるトシ。

「やつぱマニアサはマニアサ」にかかるモノだね。」

「佳奈も食つか?」

「お腹こりぱいだがい。」

「ハヤシライスでマニアになづかけた私はマニアにならなかつた。」

「最高だな。」

「え。他の店と回りだけ。」

「土方さんは舌が麻痺してるんでやア。さてと仕事に戻るとするかねイ。」

総悟が帰つてからトシがタバコを吸いだした。

「二人きりだな。」

「トシハジマニコナリ何?」

「今はいいけど。総語とほせつてえ一人きつくなるこじやねえぞ。」

「

「はーい。」

「じゃ、俺行くわ。」

ポンポンと頭をなでられた。

「子供扱いしないでよ。」

ウソ。本当は嬉しいんだよ。

「明日メシ食い行くか。」

「んー。しまじま無理。」

「 はあ？」

「 ちよつと健康の為にね。」

「 セリニヤ太つ…」

「 鬼の副長が私なんかとランチなんて笑われるよ?」

トシは一ヤツと笑つた。

「 別に笑われてもいいぜ?」

「え…？」

トシは裏口から出た。

……

「 何言つてんだ俺。」

「土方さん。抜け駆けはいけねエですぜ？」

バズーカが飛ばされたのは言つまでもない。

泣ける映画じゃ泣かねェと思こま

暇すぎて死にそうなので、映画を見る事にした。

「」れは運命でイ。」

「総悟も映画見るの？」

「『フランダースの犬』ね。」

「一緒に見ていいけど、轟壊さないでね。」

総悟と隣に座った。ひょつて真ん中へくん。

「クチャクチャクチャクチャうるせえ。」

「ポップコーンだからしうがなこじやん。」

映画が始まった。

『「この斧があれば、黄金の木を切れるんだよー』。『ダメだ。この斧に触つたら不幸になるんだぞ！』。『おじいちゃんが助かるなら僕は構わない』

「グスツ…。そ、『』。ハンカチかして。」

「ずびつ。鼻水つきならあげるぜイ。」

総悟が泣いてる！？

「俺ならあの斧で土方の野郎を…」

ブシブシと書つ總悟。やつぱり泣いてないんだ。

映画が終わって映画館を出た。

「総悟田真つ赤だよ。またか泣いて…」

「花粉症が再発したのかもしんねエなあ。ひょっとしてあの木は花粉が飛んでたんじやねエかい？」

「映画の木から花粉は出ません！」

「よし。フランダースの斧をハゲに作らせるぜ。」

本気で言つ総悟が微笑ましく思えた。

「総悟ちゃん。どうもん呼ぼつか？」

「まさか知り合いだつたんディ？」

⋮。

フィクションとノンフィクションを見分ける大人になろう。

嘘から始まるモノなんてねーとは言わない

スーパーの娘の佳奈ちゃん？実は従姉妹の親父の友達の娘でも何でもねーんだよ。

ほら、たまに町で見かけるたびちょっと気になつてたから、他人行儀な態度されんの嫌だつただけなんだよね。

「銀さん。それストーカーだよ！」

「ストーカーはよくないアル。作者真面目にストーリー考えろよ。」

『万事屋銀ちゃん』は今日も暇である。

「ピラ配りのバイト手伝つて欲しいらしいですよ。」

「だりい。新ハ頑張れ。」

「なんでも、真選組前のスーパーらしいんだけど……。」

「あそこ嫌いアル。酢昆布いつつも置いてないヨ。」

俺はジジッと拳手した。

「ソコは俺が引き受けた。新ハと神楽はパチンコ屋のチラシ配つとけ。」

「えー。なーんか怪しいアル。」

ビラを取りに行く為にスーパーに向かった。

勘違いして欲しくないんだけど恋とかじゃないからね。

「銀さんここにまひはー。」

うわあ。なんかシャランラン的なBGM聞こえて来たよオイ。

「ビラ配つ手伝いに来たんだけど。」

「本当に配つてくれるんだね。はい。コレお願いします。ちなみに歩いて10分以内の場所くらいままでいいから。」

「ほっこり笑いかけてくれる佳奈ちゃん。

「え。ひょっとして佳奈ちゃんは配んないの？」

「うふ。今日は珍しく休みなんだ。」

「マジで？俺何しに来たのよ。親睦を深めたいから真選組の前と書つハンデを突き破つて来たのにこの仕打ち？佳奈ちゃんってアレ？極度のう？」

「途中まで一緒にいくかな。」

俺は心の中で小さくガツツポーズをした。

「このチラシ佳奈ちゃんが書いたの？」

「分かる？」

字がギャルギャルしますから誰でも分かるだろ。

「従姉妹のおじさん元気?」

架空の人物が元気か聞かれたよ。

「あー、タラフクさんね。確かに今風邪こじらせて寝てばっからしい上。」

「あははー・タラフクさんらしいね。」

いや、もータラフクさん貴方誰ですか?
そして通じるんだタラフク。

「そういえばコンちゃんが銀さんに会ったがってたよ? 最近お店に
来てくれない…って。」

コンちゃん?

俺の架空の従姉妹か。

「コンは金ぼつたくるから俺としても辛いのよ。」

「えー。銀さんは厳しいんだね。」

蟻地獄だ。話が全く分からねーのに繋がるつて何ー何なの?むしろ繋がって欲しくないんだけどーー

「じゃ、またね!銀さん。」

「おへ。ペリ配つ頑張るからよ。」

いつてまた佳奈との溝が深まつていった。

⋮

「適当にコンちゃんつたり通じたし。コンちゃんつて誰?」

悩む佳奈でした。

新撰組？いや新選組ですか？」

新撰組じゃなくて真選組じゃん。と匪つ方、その通りなんです。

「んー。朝か、ひるか、夜か、いつかいい。」

パチン

蚊は叩かれた。

「うひもひりんな時間！総悟に怒りられるー。」

佳奈はバタバタしながら顔を洗い、着物を着て家を出た。

「俺の愛が痛すぎて逃げ出したかと思つたぜ？」

「いや、誰？」

家の前に立つてたのは紛れもなく総悟だつた。

「今日は土方の野郎もいねエ事だし。トートでもじやすかい？」

「何頃かの？今田アシヒロの感謝をこめてプレゼントでござります。」

「マジかよ！ もうこいつ事なら一人で行けや。」

「早く行くよ。」

総悟の手を止め歩き出した。

「はあ……。休みだつてのになんで？」

「アシヒロ、お好きじこみな。新しいこの街も、まだいい加減つづく

「ゲーム機がね」とさき出された。

「総悟はつまさなをついた。」

「総悟ひてばーお父さんとバズーカの改造の話の時だけイキイキしてゐただからー。」

「へいへい。土方の野郎なんてケチャップ貰えば良いんじゃねェか
イ?」

「ケチャップ?」

「マコよつ使えますせイ。もしもの時に血のつにならし。」

マコよりケチャップの方が健康には良いかも。

「よし。トシをケチャワーに変えよつー。」

「プレゼントも決まつたことだし、散歩でもどうでヤ?」

手を繋がれ私は笑った。

「ヒスパーとよろしく。」

次の日。

「じゃん!ケチャップあげる!」

「金ついてやうやうひだ？」

「これからはケチラーラーになつてください。」

「ケチだアア？ テメーらおちよくなつてやがんのか！？」

トシに追いかけ回されたのだった。

銀ぎゅうことに書いていい加減と読む

嫌アね。これは偶然だから。偶然少し前に佳奈ちゃんが歩いてるってだけだから。

ほり、電信柱に隠れたりとか全然しないよ俺。

「銀さん？」

「偶然。ホント偶然！こんな偶然あつていいんだろ？」「

ホント俺何してんの？佳奈ちゃんのストーカーになつかけつただつたよ。

「銀ちゃんつて呼んでいい…かな。」

「じゃあ、俺は佳奈つて呼ぶから。つて向この甘酸っぱいやつ取り。酸っぱいのいらないから。」「

クスクス笑う佳奈が可愛いくてテンションが上がる。

「銀ちゃんもペットショップに来るんだね。最近のペット面白いよ
ね。」

ふと気付けばペットショップに入っていた。しかもこじは座じこと
評判の闇のペシティショップ。

ホルマリン付けとかこっぽい並んでるし。

「あー、ファミレス行かない?」

「なんで?せっかくここまで来たのに。」

するといかにも座じことですつて感じのターバンを頭に巻いた店員が
近寄って来た。

「コノ犬しゃべる?」

と曰て豆柴を抱き上げた。

「銀ちゃん何か話しかけてみてよー。」

「えー？…名前は？」

「ボクまだ名前ない三。」

いやいや、オッサンがしゃべってるがな。
佳奈ア？なんでめつちや嬉しそうな顔してんのオオオオ？

「しゃべる犬はいへりへ。」

「オマエラ庶民には買えない値段三。」

「いいなあ。欲しい。欲しいよー銀ちゃん。」

「何援交の雰囲気かもし出してんの？銀さん帰るよ。」

ガー

「手を挙げろー！」

真選組登場。

「ターバン野郎だけでいいですか。…あれ？佳奈に万事屋の旦那ではねエですかイ？」

「総悟そつせり行つたぞ！」

ガツ

総悟は店員の足を引っかけ、転ばせた。

「客からじまつたくるたアいい度胸ですか。」

「いいから手錠かける。」

こうしてインチキ店員は捕まつてつた。

「佳奈も来やがれ。」

「やだ。」

「万事屋の野郎と二人きりたア、妬かせてまで俺に振り向いて欲しいのかイ？」

「ビリがどうなつてそつなるのー。」

佳奈は大畠くんに連れられてつた。

ワン！

「そんな田で見ても飼えねエからな。」

俺は一人店を出た。

チャイナさんの正体

道端に食べ物が落ちてたら拾ってはいけません。
それは誰でも理解している小さい頃からの教え。

「ウマイ棒みつけ。」

そのチャイナさんは落ちていたウマイ棒を拾った。

「そんなの食べちゃダメだよ。」

「酢昆布無いスーパーの娘に言われたくないアル。」

ヤンキー座りしながらウマイ棒の袋を剥いてるし。

「結構前にウマイ棒に変なの入ってたってニュースで見たけど大丈
夫?」

「ムシャムシャ…。そんなに欲しいならくれてやるπ。」

と言つて袋を投げた。私はゴミ箱かよ。

「真選組のみんなが言つチャイナなんだよね？」

「チャイナ？ どこの田舎付けてるか。これは口スプレー無いアル。

」

「やつぱりそつなんだ！ 可愛いね。もつとセクシー系なのかと思つた。」

「ここのナイスバディが見えないか！ 胸なんてこんなヨー。」

ムキになるあたり可愛い。

「神楽ちゃん。またこんなところでサボつて…」

メガネくんが歩いて来た。ああ！ この人が山崎くんと同じくらいの存在感の人だ。

「コイツが拾い食いしてたアル。」

「いや、口の周りにカスつけて言われても信じないって。すいませんね。… あースーパーの娘さん！ 銀さんが迷惑かけてますよね。」

「あいつがペコペコ頭を下げるメガネくも。

「あのー、楽しいからいこでよ? それに銀ちゃん面白い。」

「なんて良いい人だ。つて神樂ちゃんがいないー。じー、またー」と
「…」

「佳奈です。」

「佳奈さん。僕は新ハです。じゃ、またー。」

バタバタと新ハくんはいなくなつた。

銀ちゃんに会いたいな。

「佳奈。こんなとこで向してんだ?」

「なんだトシか。」

「ああ?」

そうタイミング良いくらいみたい。

スーパーマリオギャランドウ。

「オイ。総悟。」

「俺は今爆睡してんじゃア。邪魔しねエでくだせエ。」

「いや、バリバリ起きてんじゃねエか。」

「へッ。」

「しかも今鼻で笑つただろ！」

総悟に聞くのも面白くねHから、自分で会いに行く事にした。

ガー…

「こいつセーませー！」

「おじさん。佳奈は？」

ハゲがまた一段と光つてゐる。

「部屋で彼氏の総悟くんとギャラングウしてゐよ。」

「ギャラングウだアアア?」

俺は迷わず突撃した。

ドカドカドカ
ガラッ!

「総悟つてゲーム下手なんだね。」

「まさか。このセンターが壊れてるんでイ。」

「マコオジヤねエかーあのオヤジ...ギャラングウとか言つてたゼー。」

「トシもある?」

「ギャラングウで何想像しやがったんですかイ?」

「ヤニヤ笑つ総悟に腹立つ。でか、口イシセツあまで寝てたじめねエか！」

「お父さんひでキヤラーンドジヤなへてキヤラクシーダシ。」

「キヤラクシーバ。」

「マコオが銀河を旅するつて話しだすねイ。」

「マコオが銀河を?
へえ。面白やうじやねえか。」

久しぶりにワクワクしてきました。

「佳奈。もひ田が疲れたんじゃねエかい？」

「だね。終わるつか。」

「オ……オイ！」

二人は同時に振り向いた。

「俺もやってみたいんだケド。ダメ?」

「やー今まで言ひうなじょ、うがねエ。」

「いや、私のだから。」

そして夜更けまでスパンやラジアンブーケやジャージーにも乗つた。
総悟と佳奈は側に雑魚寝していた。

「げ。夜更けどこか夜が明けるじゃねえか。」

たまにはこんなゲームもいいかもな。

愛しいかい？切ないね。

「最初に『いつとくけど』これは恋とかじや全然ないから。」

銀さんが『いつ』と言つ出して、僕は顔を上げた。

「そのくだり言つた時点で恋ですね。」

「コイ？ 美味いアルか。」

「酢昆布くわえながらまだ食ひ物の話してゐるヤツがいるよ。」

「銀ちゃん。スーパーの娘ならもれなく余つたお菓子も付いて来る

『三。』

「スーパーのお菓子余らないからー。」

「メガネは黙つとけ。銀ちゃんに言つてるアル。」

神楽ちゃん前半標準語だし。

「神楽がどうしていつも一人なり、佳奈ちゃんに会って行くんだ？」

「いや、銀さんやることあるでしょ。れつき依頼人のお世話を帰つたばかりじゃないか。」

「んー。明日で戻るね？ 銀さん疲れた。」

「何だよこの甘えキャラリゼー

「おどぶってあげようか？」

「振り落とされるからやめとく。新ハお願ひ。」

「えーーー？ 僕がおどぶするんですか？」

「…………。冗談だよ。そんな嫌な顔することないじゃん。」

「じゃあわの間はなんだアアアーーー！」

「愛しいとせつない？」

「そんなもん捨てちまえーー！」

近頃の銀さんは佳奈さんに夢中らしい。
けど恋とは認めたくないらしくため息ばかりはいている。

「ハア。」

「銀ちゃんが昼間から歸りでるアルー！」

「神楽ひやん。どいでそんなの覚えてるの？.」

「深夜番組アルー！」

結局銀さんは出かけなかつた。

お客様困ります

「佳奈ちゃんお願い。お客様困りますって言つて?」

突然来て突然こんな事言われて少し苦笑いした。

ドカッ!

新八くんが後ろから銀さんをどついてるし。

「あんた何言つてんだよーお店間違つてるよー。」

「困らせたいなら困らせればいいアル。」

「お客様困ります。」

お父さんが後ろから言つた。

「つぐつ。なんだろ?」の胸焼け。急に吐き気になっちゃつたよ
俺。」

「銀さん何想像してんですか!」

「ナニ? 可。」

「三三人のパンツはこいつ見ても面白いなあ。

「万事屋の田那。住前の『お密様困ります』は俺のモンドさや。」

裏口から堂々と入って来た総悟。

「『あ。困ります』でよん。トシ。』 とちまわせたことあるか?」

「ちよつとも一瞬間にそんなふりふりの『ん』を付けた覚えないんだが?」

「今更HせH『あ』 入ってたせイ?」「そんへらー良じやん!」

「つぱ『ん』付けてたかも。自分が自分で恥ずかしい!」

「えー。俺も困ったひやん欲しい。新八俺にも買つてっ。」

「困ったひやんは親しい人限定らしいですから無理みたいですね。」

「わい。銀ちやんは困ったひやんアルね。」

「うー。神楽ひやんが話まとめてる。」

「俺も困ったひやん欲しいでせー。土方せん頼んまセー。」

「オイ。俺が困ったひやん弓を出すのかよ。自分で引を出せ。」

「はあ。いいここののが密なうなあ。佳奈。部屋で遊べ。」

「えー?みんな入んないよー。」

「マリオで勝ったヤツが佳奈の困ったひやんを手に入れるってのは
ビリードア?」

「銀せん頑張りやひよ。」

「うつて私の部屋に入る面々。

「リリは寝かこのマリオカーテンを引いて。」

トシが腕まくらした。

「お密様困ります。」

「はへ。」

「佳奈ちゃん？」

「タイミング悪すぎだぞ。」

「私の部屋はゲーセンじゃないのー。神楽ちゃん。酔邸布あげるからみんなを帰りさせてー。」

「ナニウチハ」となじゅうがなに。銀けん帰る。

神楽ちゃんは銀ちゃんを抱いだ。

「佳奈さん。迷惑かけてすいません。」

「んーん。また田を改めて遊ぼうね。」

万事屋さんの三人は出てつた。

「結局この二人ねイ。」

「じゃあ総悟が帰れ。」

「また抜け駆けですかイ？土方コノヤローリ。」

トシと総悟といふと落ち着く。男友達ってこんな感じかな。

「佳奈はどうちといたいんだ？」

「んー。」

二人がジツと私を見た。

「じゃあ、山崎くんで。」

そこにはちょっと焦る一人がいた。

ふと迷言を思い出すと疑問ばかりだ

「バカって言う方がバカなんだよバーク。つて最後にバカつつって
る本人がバカなんだと思いやせん?」

総悟はたまに突拍子のない発言をする。

「いいかい?佳奈の彼氏の総悟くん。バカって何度も言つ後者がバ
カなんだよバーク。」

「それはハゲ…おやつさんの事ですかイ?」

今私のお父さんと決して彼氏と言えない総悟がバズーカの改造をし
ている。私は麦茶を片手に様子を見に来たところだ。

「まあ、ムキになる方が子供だよね。」

麦茶をお父さんと総悟に渡して私も最後に手に取る。

「私、アレが嫌だった。せーんせに言つちやーるーつてヤツ。」

「ガキの頃つてそんな発言『ロロロロ』してつからな。」

「セウでセア。…つて。土方コノヤロー。こいつからこじこやがりやした？」

「スーパーでマツを調達してから来たぜ。まーたくだらねえモン作つてんのか？」

「土方くん。まさか…略奪する気なのか？」

「お父さん何妄想してんの？ドラマの見すぎー。」

「身内の恥ずかしい発言つてこいつまで恥ずかしくなるよ。」

「略奪の前に総悟と佳奈は付き合つてねえだろ？」

「チッ。余計な事を。」

「まあ一人のどちらかなら大歓迎だよ。…あの銀髪以外ならね。」

「えー？銀ちゃんいい人だよ。」

「土方くんも何か作りたいか?」

お父さんが優しくトシに笑いかけた。

「笑うと佳奈と似てんな。」

「本氣でやめて!」

「小ちな頃はお父さんお父さんって書いてたのに寂しいモンよ。」

「ハゲつてどこ以外はパーフェクトですか。」

「総悟怒るよ?」

結局、トシは総悟を仕事に戻しに来たみたいだつた。

お父さんが銀さんが苦手なんて意外だなあ。

「銀髪は無職なんだろ?」

「万事屋さんだよ。」

「万事屋？怪しいな。」

心配してくれるのは嬉しかつたりする。

いつもありがとうございます。お父さん。

トシと銀ちやん

総悟に聞いた話によるとトシと銀ちやんは道端とかでばつたり会つらしこ。

「あの二人は実は運命の縁イ糸で繋がつてゐるらしいでイ。」

「いやいや、縁じやないでしょ。」

「赤ならもつと氣色悪いと思わねエかイ？」

色は置いといて。どんな感じなんだろ？。

その頃のトシ。

「土方くん。邪魔しないでくれる？」

「お前が止まればいいだけだろ！」

一人は気が合つたらしく右に行けば右、左に行けば左。と互いが邪魔

になり通れずについた。

「まさかまた俺の「行くと」に出現する気?」

「お前がいるだけだろーが!」

そして二人は来た道へ引き返した。

「つたぐ。なんでいつもいんだよ。氣味が悪い。」

トシは暇なのでそちらへんの喫茶店に入つた。

「お姉さん。パフェ大盛りで!」

「大盛りは今やつてないんですけど。」

さつそく銀髪が見えた。腹減つたししゃあねエ。

「いらっしゃいませ。」

「牛丼一つ。」

「かし！」まつました。」

牛丼が来てからマヨをぐるぐるとかけた。

これぞ土方スペシャルだ。

「うわ。 マヨに惚れでもあんの？」

「うひーち座んな。」

「実はさ。 財布忘れちゃったみたいなんだよね。 土方くんおうひって？」

「そりゃ大変だ。 食い逃げで逮捕しねよとな。
「ちょっと待つてよ！ 土方くーん！」

「その呼び方やめる。」

仕方ねエな。

「で。何で俺を呼んだんですか？」

5分後に総悟が来た。

「コイツが財布忘れたらしきぜ。総悟が払え。」

「真選組宛ての領収証作ればいいですか。」

「最近領収証増えたと思つたらテーマか！」

「じゃあ真選組宛てね。ありがとう土方くん。」

なれなれしんだよ。

「土方くん万事屋の旦那と友達だつたんですかい？」

「『くん』じゃねえよ。」

「土方つち。」

「オイオイオイ。テメーら斬るー。」

とまあこんな感じりしー。

「だから總歸も知つてゐるんだね。
「呼ばれても行きたくねHやイ。」

「こや、ワクワクしてゐよ。ね。」

運命のイタズラとはこの事だね。

スクワットは健康に良い

体重計に乗るのが怖い今日この頃。

やつこつ時はスクワット！

テレビからタイミング良く流れで来た声。

「これだ！」

私はスクワットを始めた。

店番の暇な時もスクワットしちゃう。

いーち。

にーい。

「佳奈ちゃん。ソレ新しいキャグ？」

「あー… 銀ちゃん！」

「さすがにガラス越しに見えちゃったよ。うん。銀さんはアリだけ
じゃね。」

「やめてー！総悟には絶対言わないで！」

あのS男にバレたら…。

「スクワットねイ。」

「真選組の連中にはメガホンで流しやした。」

ニヤリツ。

「銀ちゃんのバカ！」

「え？俺のせいぢゃないよね。」

「デブ女になる前に瘦せてもわらねHと嫌いになるぜ！」

「付き合っていないからー。」

「じゃあ、銀さん帰るから。たまには万事屋銀ちゃんを遊びに来て。」

総悟が来て元気のなくなつた銀さんは帰つた。

「裏口の扉鍵がかかつてたゼイ。」

「お父さん今日こなーよ？』

「じゃあ、違う方法でダイエットはどりいでか？』

総悟の顔が近づいてきた。

「…

『チン！

「持ち場を離れんじやねえよー。」

「土方」「ハヤローーーー！」

ドキン

ドキドキ

私避けなかつたへビのうじ。

「佳奈。スクワットよつランニングがオススメだぜ。」

「 もうここよーーー！」

スクワットよつといんですー、ダイヒツトよつめにやつましちょー。

寒いと食べたくないのでは結局夏も食べてんじゃねえかアアア！

寒いとお姉さんも来ないか。

「寒くなくても少ねえだろ。」

「トシ。こつからいた？」

「またそれかよ！挫けねえからなー。」

ベースモカーダから味覚アリテバしなんだうつな。

「で。何の用？」

「佳奈は冷てHな。」

「まーた。元カノと比べないでよ。」

暇な日とか来てくれるのはすげー助かる。強盗とか入りそつだしね。

「あー…、寒い。そろそろマヨホンデュの季節だな。」

「そのホンデュ何？普通チーズとかチョコレートだよね？」

「あの油が浮いた感じがいいんだよ。」

「あーやだやだ。想像したくもない！」

今日は総悟来ないんだ。

「俺とキスしたらビーフの味か分かるぜ？」

「急になにー！」

「マヨかタバコか。」

「ヤリソッと笑ったトシの顔はカツコイイと思つ。

「どうせやだ。私はまだまだ子供なんですね。」

「子供…か。」

モツツガラヤギ、トシは帰つてつた。

「冗談だよね。

うん。

熱くなる頬が私の気持ちを惑わせた。

神様ひつかリアリティを僕に下れ。」

お店の前を掃いていたら山崎くんが屯所の門からひょいと戻ってきた。

「山崎くん今日もお疲れさまー。」

「佳奈さん。お疲れ様です！」

なんか、疲れてる？

「タベ副長に徹夜で報告書書かされてたんですよ。」

「そうなんだ。大変だつたね。」

トシは鬼の副長と呼ばれてるらしい。そんなに怖いのかな？・リアリティがわからない。

「何ウロウロしてんだよー。」

「わっ…隊長！今すぐ車出しますー！」

「土方の野郎機嫌悪すぎでイ。」

そんな総悟も機嫌が悪そつ。私は声をかけないよひとした。

「佳奈。やじにてるのは分かってますが。」

「いやあ奇遇だね！」

「今から山崎ヒラライブに行くんだけどよ。佳奈もヒラセアヘン。

「ビーセ見廻りでしょ？」

「ちゅうじ山崎くんが車を回して來た。

「ちゅ。タイミングの悪いヤツ。じゃあまた土方の野郎と二人でー。」

「うふ。考えとくよ。」

パトカーを見送った。

機嫌の悪いトシつてどんなんだ。元からぶつかり合うな感じではあるけど、分かんないな。

「よっ。」

噂をすれば影だね。

トシが道路を渡つて歩いて来た。

「週末は忙しきぜ全く。佳奈んと「も棚卸しあんだろ?」

「お疲れ。ウチは両親がやつてるからね。けどバタバタしてるかも。」

「

「近藤さんがあ一人良しすぎんだよ。俺も精一杯アシストしてつむりだけどよ。あー、さすがに疲れた。」

トシが愚痴つてる。

なんか嬉しいな。愚痴つてくれるのって珍しいしね。

「なに一ヤ一ヤしてんだ?」

「トシも人間だつたんだなあつて思つてそ。」

「はあ？…じゃ、俺は戻るわ。」

やつぱりトシも機嫌が悪い日があるんだ。
それはリアリティ溢れる事実だね。

銀髪と白髪の違い

遠田から見たら銀さんは白髪だ。けど、それは誰にも…

「オイオイ。白髪の旦那また来てるゼイ。」

「総悟！白髪とか言ひやがダメだよー。」

思つた矢先に総悟が裏口から入つて來た。

「じゃあ、信号を青と言わないのかイ？アレは縁だろイ。」

「あー、それは決まりだからね。」

「めんどい。白と銀は同じでコトにしてけよ。」

総悟がアイマスクを取り出した。

「暇で良かった。俺は親父さんの隣で毎晩でもするかねイ。」

「こや、手伝へよ。」

裏に行へ総悟。

「佳奈。元氣？銀ちゃん来ちやつたよ。」

「銀ちゃん。見えてたよ？昨日も来てたよな。中まで入って来ない
かいびつしたのかと思つたよ。」

「こやあ。急に仕事が入つちやつてね。」

「仕事？変な銀ちゃん。」

銀ちゃん圓田一なあ。あ……まさか、圓髪なり圓田でさうなるじゃ？

「聞いてる？」

「あ、」めさね。白ひきさん。」

しーん。

「で、新発売のお菓子食べたくなったんだ。オススメある?」

「なかつたコトにされてるーー?良かつたのか悪かつたのか分からない。

「」のチラリ饅頭といつぱこしおこじこよ。

「饅頭は白いのが美味しいからこいや。じゃ、白いもんまた来るわ。

」

根に持つてひしがねーー。

銀ちゃんは帰った。

「ふう…。白いもんじま、佳奈は馬鹿でわよ。」

「笑うんだったら笑つてよー。」

「あんそろ戻んね」と土方の野郎に…

「総悟オオオオ！またここかアアアアア！」

「げ。じゃまた。」

なんか、こんな日も好きだな。

一人になりたい時もある

1年に一回くらいかな。ずーっと部屋にこもるつもりたい日がある。

今日がまさしくそれだ。

実家暮らしで何を贅沢な。と言われそうだけど、理屈じゃないんだな。

「今日ははどうも接客できそうもないんで。」

「こつも客なんて数人じゃない。」

「うめん。」

お母さんにそつと云えて布団にもぐった。
罪悪感と開き直りが私の頭を支配する。

けど人に会いたくない日もある。

「うれしいもづか?」

「えー？ いつからいた？」

「普通にお前の母ちゃんがドア開けた時に決まつてんだろー。」

トシがベッドに腰かけて座つてる。

「今日は一人になりたいの。 一人にして。」

「贅沢だなオイ。 そんな時大抵一人でいたら、ぐずぐず嫌な事ばつか考えるつて。」

「……。」

「佳奈ー？ 聞いてんのか？」

あーうるさい。 こういう時一人にさせてくれる人がいい。

「土方さん帰りますぜ。」

「 じょうがねえな。じゃ、また来るから。」

へえ。総悟もたまには気が利くじやん。

「あの女はいけ芋ムシがお似合いでさア。」

ちゅうと今のさすがにイラッと来たよ。

二人はドアも閉めずに帰つてつた。ドア閉めてよ。

サボリつて人は言つかもしれないけど、私は一年の疲れをリセットしてゐつもりだ。

芋ムシ上等！

：

「芋ムシは言ひ過ぎじゃねえか。」

「佳奈が立ち上がりればいいんでさア。」

二人はこんな会話をしていた。

鬼の副長

「オラアー！サボってんじゃねえぞー！お前、刀なら刺さつてんだろー！」

鬼の副長の声が道場に響く。

「総悟ー！」

「…。」

「総悟オーー！」

「はあ…。いくら何でも機嫌悪すぎでさア。」

ギロリとトシに睨まれる総悟。他の隊員はハラハラとその状況を見守っている。

「機嫌が悪いだと？」

「女が原因で情けねー。なあ山崎?」

「俺つか?」

「山崎いい!」

「ハイイイイ?」

山崎がハツ当たつされたのだった。

稽古後。

灰皿にタバコが山のようにつもつていく。

「そして貧乏ゆすりってか。」

「近藤さん。」

「総悟がメガホンで叫び回ってたぞ。女が引きこもりになつたんだ

つて?「

「どうすこいつがいいんすかね。」

…。

「総悟みたいな対応がモテるって誰かが言つてたぞ。」

「総悟?」

「ま、たまには機嫌の悪いトシもいていいと思つだ。」

あなたにつっこえきます。

「近藤さん。」

「あー、ウーハ。さつさ行つたらトイレ混んでたれ。」

「はあ。」

「こんな近藤さんだからいい…のか？」

立ち直り早いんです

引きこもった翌日私は平然とスーパーのレジを打っていた。

もううん営業スマイルで。

「真選組ソーセージ一点。」

「もう立ち直ったのかよイ。つまんねH。」

「わ。総悟！」

「土方の野郎柄にもなく落ち込んでだゼイ？」

領収証は真選組当て……ど。

「私何か言つたっけ？」

「ま、佳奈の立ち直りの早さは今に始まつたことじやねエけどねイ。」

「

ニヤリと意味有り気に笑つて店を出る総悟。

久しぶりに店が混む嬉しさよりトシが気になっていた。

閉店後。

ちなみに8時閉店。両親のやる気のなさが伝わる。

私は店の前で待っていた。

ちよつと真選組屯所の門が開いた。

「よっ。元氣そうじやねエか。」

トシがここにタバコを吸いに来る時間当たつてた。

ちよつと予想した自分が恥ずかしくなる。

「昨日は落ち込んでいい日なの。充電つていうか、トシには分かんない？」

トシはゆっくり道路を渡つて来た。
そして隣に並んだ。

「それをサボりつてんだよ。そのまま引さいもつになつや良かつた
んじやね?」

ポン...と頭をなでられ、私はつづいた。

「タバコ臭い。」

「俺?」

「体に毒だよ。」

「へー。心配してくれてんのか。」

薄暗く見えるトシの顔がいつもよつつかつとしてキツとした。

「鬼の副長さんは自慢の友達だからね。」

「…。そろそろ戻つか。」

トシはそれ以上は何も言わなかつた。
私は門を開けるトシをただ見ていた。

「カーットー銀さんは?ねえ。銀さん出番無しつ。」

「あはは。今日は無いみたいだね。」

「いいや。俺もひ帰る。」

銀ちゃんの後ろ姿は寂しそうだった。

押してダメなら引いてみよっ

つてわけで俺こと銀さんは、押してダメだから引いてみよっと思つたんだよね。

「存在を氣付かれて無いだけアル。」

「もう通つのやめた方がいいよ。てかやめて働けよ。」

「別に片思いとかじやねーし。妹を見守つてるだけだし。」

こつじて俺は散歩に出た。

うん。

俺はね諦めが悪いのが取り柄だけど佳奈のことばー。

「あー銀ちゃんなんだー！」

「へ?佳奈?」

「近くに来たから遊びに来たんだけど、迷惑だつた?」

迷惑と言つか今きつぱり諦めてパフェでも食べよつかなんて思つて歩いてたの。」

「あー、やっぱムリだわ。」

「え? 迷惑だつた?」

「スキだつつてんの。」

固まる佳奈。

あれ。俺今何つった?

「銀やーん! またサボるつとしてー… あれ? 佳奈さん?」

「あ、新八くん。」めん私帰るね。」

「ひいて俺の呪由は風と共に去つて行つた。」

「ううこれで出番舞しこなんねえよなー。」

「何の話ですか？早く行かなこと姉上に怒られますよー。」

「…忘れてた。」

「皆田のことは黙つてあげますから。」

「新八。」

「はい？」

「銀さんパフュ食べたい。」

その頃佳奈は辞書でスキを調べていた。

「「れだー」の『隙』ー。」

「うごうヤツをただのバカと言つ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524x/>

新撰な彼ら

2011年11月29日20時54分発行